
書 評

Roberto Cuca and Catherine S. Pierce, *Experiments in Family Planning, Lessons from the Developing World*, A World Bank Research Publication, The Johns Hopkins University Press, Baltimore and London, 1978, xv+261pp.

世界人口は現在40億を超え、なお年率2%に近い増加を続けている。先進国ではそれが1%以下の国が多いが、開発途上国では2.5%以上のところが目立ち、国連推計によれば今世紀末63億になる世界人口のうち、49億は途上国によって占められるとみられている。ただ近年ようやく途上国の中でも出生力が明らかに低下しはじめた国が現われ、低下要因のひとつとして家族計画普及政策の効果が挙げられるようになった。

世界銀行は、1968年秋の総会におけるマクナマラ総裁の演説を契機として、翌69年、行内に人口計画局を新設し、途上国における人口分野の活動を援助する方針を打出し、78年夏までに13カ国15計画に対し融資を行なっているが、将来に備え各国が既に独自に試してきた各種実験を洗い直し、方法や工夫を比較検討し、そこから計画改善の指針を探ろうというのが、本書のねらいである。

共著者はともに世銀職員で、Cucaは前記人口計画局所属の経済学者、Pierceは経済開発局に籍をおく人口学者である。本書は、60年代の家族計画運動の欠陥を反省し *Beyond Family Planning* の言葉を創った Bernard Berelson の序文で始まり、第1部分析編は、実験方法論、統計技術、評価と将来の指針などを取り扱い、第2部実験編は集録した世界各国の実験例を紹介している。

本書の第1の特色は、過去の実験調査法に対する評価の厳しさである。先例のない初期の調査であり、家族計画分野の実験はとくに困難であることに理解を示しつつも、27カ国96例（うちアジアは最多の69例）のうちわずか12だけが random 抽出、control group の設定、pretest の施行という調査企画3原則をそなえているが、29はそのいずれかの段取りを欠く quasi（疑似）調査であり、さらにその他の55例は、調査といえない宣伝運動に過ぎないと痛論している。さすがに銀行調査にふさわしい厳密な考証で、専門家にとっては他山の石となるが、反面、途上国では実験を始めること自体に意義がある点を考慮するとき、将来のためを思うこの評価も牛を殺すおそれがあるろうし、また世銀の融資には必ず調査費用が含まれ、定期的報告の義務が課せられていることに対する現地の負担と反発を忘れてはなるまい。

第2に投資効果と規模拡大の重視である。たしかに器具薬品配布数、アクセプター数などの増加が直ちに出生抑制制度に結びつくわけではないし、それゆえ無妊娠を効果の指標とせよとの主張もわかる。また短期で小規模な実験方法を全国規模に移しかえたときその効果が薄められるおそれもあるだろう。しかし家族計画の目的が、本書に定義しているような単なる出生力抑制だけでなく、生活向上意欲の刺激にあると考えるならば、出生抑制制度不明のマスメディアやC B Dのチャンネルもそれなりの意味があるだろう。

しかしこれらの問題にもかかわらず、本書のもつ価値は大きい。あらゆる事例をとり上げての実証的な究明態度は説得力があるし、「外国の donor と調査者は、ホスト国の欲求以上に調査に興味をおかないよう遠慮を学ぶべきである」との自己批判もとれる記述は好感がもてる。それゆえ本書が将来の規準として示す提案も成程と思わせる。とくに評者個人（企業体新生活運動指導の思い出もあって）にとって有益であったのは、第2部の事例集であり、いずれも国名、時期、場所、実施機関、目的、調査設計、経過、結果（問題点と批評）、参考文献の順に記述紹介されて、事例の迫力と面白さがにじみ、これだけでも一読の価値がある。わが国の人口分野の国際協力の方向を模索するときにも参考になるだろう。（青木尚雄）